

共通論題「2017：不確実性の時代のアジアと世界」
(2017年度アジア政経学会春季大会、一橋大学)

グローバル・インドへの躍動：その内政と外交の交錯

竹中千春（立教大学）

企画と主旨では、「グローバルな現象として語られる『不確実性』のもつ、アジアにおける意味について議論し、そこからアジアの立ち位置について考える」こと、そして「インドは建国70年を迎えて大国としての地位を築こうとして」おり、さらにトランプ政権がどの程度 Indo-Pacific(インド太平洋)に関与するのか、という問いを与えられている。

21世紀の国際社会を大きく動かした事件の中にも、インドの国際的な地位を向上させる方向で作用したと評価できるものも、逆にマイナスの作用をもたらしたものもある。アフガニスタンとイラクにおける対テロ戦争は前者の性格が強く、リーマン・ショックを象徴としたグローバルな金融・経済危機の到来は後者にあたるだろう。その意味で Brexit を選択したイギリス、国境の壁を高くし国内市場を保護すると叫ぶトランプ政権のアメリカの動きが、インドにいかなる作用を及ぼすかは未だ明らかではない。指導的な大国の英米がこれまでのリベラルな国際秩序に逆行し、集団的安全保障の枠組みを動揺させる政策を取るとき、インドは打撃を受けるのか、あるいは漁夫の利を得るのか——まさに、インドの政策担当者も議論のただなかにある。

「権力移行」と言われる変動する国際情勢の中で、成長する他のアジア諸国と同様に、あるいはそれ以上に、インドには現状維持国家というよりも現状変更をめざす国家の顔がある。いいかえれば、中国を追って大国化をめざすインドは、自らに有利な限りは「不確実性の時代」を嫌うとは限らない、むしろ歓迎する可能性は強いということである。経済面でも安全保障面でもインドとの協力を一層強めたい日本は、こうしたインドの国際的な立ち位置と政策的意図を正確に見極めておく必要がある。

報告では、以下のような構成でインドからの論点を提起してみたい。

1. インドにとっての「不確実性の時代」
2. 「ポスト社会主義国家」から「台頭するインド」への四半世紀
3. インドを囲むジオポリティクス：「陸の国際政治」と「海の国際政治」
4. モディ政権の対外政策とその課題